

## 第9期編集出版委員会委員長を退任するにあたって

首都大学東京大学院都市環境科学研究科 河村 明

第9期編集出版委員会は、2004年8月より2年間、水文・水資源学会誌では第17巻6号より第19巻5号までの発刊を担当致しました。この間当委員会委員長を務めさせて頂き今回退任するにあたっての回想や感じたことなどを最後に述べさせて頂きます。

一言で言えば第9期は激動の2年間で、個人的には全仕事量の中で本編集出版に関する仕事に最も多くの時間を費やしたように思います。事の始まりは、委員長就任直前で且つ個人的には九州大学から都立大学への異動の直前という絶妙のタイミングで、当学会の事務業務を担当していた(財)日本学会事務センターが破産するという寝耳に水の事態でした。そのため当学会でも多大な損失を被りましたが、その損失の一部を取り戻すべく科研への申請書作成に、編集出版の状況がほとんど分からない状況で引越し前の丸1週間を費やしたのが最も大変な時期でした(お陰様で340万円が交付されました)。さらにその後、当学会の事務業務を担当する国際文献印刷社が決定する2005年3月まで、編集出版に関わる業務を委員長が代行致しました。

編集出版の事務業務の引き継ぎが終わると今度は制作会社の見直しが理事会で提案され、総務委員長、財務委員長と共にその選定作業に取りかかりました。編集委員の方からはボランティアでやっている委員の負荷をこれ以上増やすことのないように強くお願いされましたが、新制作会社の第1号である19巻1号の発刊においては編集委員の皆様(特に編集責任者)には多大なご協力を賜りました。お陰様で、その後2、3問題はありましたが現在では編集作業は順調に進んでおり、制作経費も大幅に削減されました。

現在、水文水資源学会誌はJ-STAGEを通じて電子ジャーナルとしてインターネット上に公開されていますが、閲覧状況把握のためアクセス数取得機能なども導入され充実してきています。また当委員会においては、学会誌のみならずインパクトファクター付き国際誌であるHydrological Processes(本学会による特別号)の編集も約年1号のペースで行っていますが、その編集の負担問題も顕在化したため2005年2月編集出版委員会の中に国際誌小委員会の設置を理事会で承認して頂きました。さらに小委員会委員の皆様のご尽力により2006年7月の理事会において、Hydrological Processes誌と平行して独自国際誌を創刊すべく国際誌編集委員会への昇格が認められ、来年度の総会までの発刊を目指して現在検討が進められているところです。

今期委員会におきましては、上記の国際誌小委員会委員を主に編集出版委員会委員の中から選出致しましたので、それに伴い学会誌の編集出版作業を滞りなく行うために地区グループの改編や編集出版委員の随時見直しと入れ替えを積極的に行いました。また仕事のルーチン化のため、投稿原稿を担当する査読担当委員の手引きや各号の編集を担当する編集責任者の手引きも随時更新致しました。さらに査読担当委員の負担がなるべく公平になるよう査読担当委員状況なども毎月作成しお示し致しましたが、原稿の分野により公平に割り振るのはなかなか難しいと感じました。

委員長の大きな仕事の一つに、クレームや質問、要望に対する処理がありますが、特にクレームの主な原因は査読の遅延や掲載可否に関するものとなっています。査読迅速が本学会誌の特色の一つではありますが、皆さんボランティアで協力して頂いていることもあり、これがなかなか難しいというのが現状のようです。事前の査読担当委員引き受け確認や毎月の査読状況報告を的確に把握し適切な対応を小まめに行うことが、最終的にはクレーム対応の時間を少なくするコツのようです。

今期の委員会では、学会誌をこれまで通り遅滞なく発刊するというのを第一に掲げてきましたので、特に新しい編集企画もなく、また学会誌の電子投稿や電子査読システムの導入に関しましても検討できず力不足の感は否めません。次期委員会の課題としてお願いできればと思っております。

最後に、以上のような混沌とした状況下で、力不足の委員長を支えて頂いた風間副委員長、堀幹事長をはじめとする編集出版委員の皆様(特に各巻号の編集責任者の皆様)、発刊にご尽力頂いた信山社(現、学報社)・松澤印刷並びに大應の制作関係者に心より御礼申し上げます。